

意味と形式の対応と日英語比較小論

佐々木一隆

はじめに

言語における意味と形式の対応関係を見てみると、基本的に意味（換言すれば、伝えたい内容や状況）はどの言語でも共通と考えられるのに、それを形式（＝音声）で表そうとすると言語間で相違が生じる。このような意味と形式の対応を捉えることが、言語研究の重要な仕事である。そして、言語学者は両者の仲立ちとして文法を仮定し、その文法の解明を通して意味と形式の対応関係が捉えられると考えている。

本論文の目的は、日本語と英語の事実関係を、大津（2004）で論じられているミラーイメージ、あいまいな表現、複合名詞、依頼の疑問文、敬意表現、接続表現の省略という6つの観点から比較して、意味と形式がそれぞれどのように対応するかを見ることにある。

1節以降でこれら6つの観点から具体的な考察を始めるが、それに先立って、日本語と英語の音声の比較を簡単にしておきたい。両言語の特徴は次のようにまとめられる。¹

| | 日本語 | 英語 |
|-----------|--------|-----|
| 音 節 構 造 | 単純 | 複雑 |
| 音 節 の 終 り | 基本的に母音 | 子音 |
| アクセント | 高低 | 強弱 |
| 音 の 高 低 | 語中 | 文全体 |

一般に日本語の音節構造は単純であるが、英語の音節構造は複雑である。なぜなら、日本語では手 (CV)、絵 (V)、円 (VC)、点 (CVC) のように、V (母音) を核としてその前後にC (子音) が最大限1つずつしか許されないのに対して、英語ではstrength (CCCVCCC) のように、V を核としてその前後にCが3つずつ現れることもあるからである。また、日本語の音節は母音で終わることが多いが、

英語の音節は相対的に子音で終わることが多い。さらに、日本語は高低アクセントであるのに対して、英語は強弱アクセントである。例えば、日本語（標準語／東京方言）の「東さんが東から干菓子を持ってきた」では、名前の場合はひがし、方角はひがし、菓子はひがしというアクセントで発音され、これにより三者の意味が識別できる（『読賣新聞』2005年6月12日より）。他方、英語のincreaseでは、名詞の場合は第1音節に、動詞の場合は第2音節に強勢が置かれて、両者の意味が識別される。そして日本語では高低アクセントは語中に現れるが、英語では強弱アクセントが語中に現れ、さらに音の高低の変化もあり、それが文全体に広がってイントネーションを構成する。

1. ミラーイメージ²

日本語と英語の語順は、次の対比から分かるように、一般にミラーイメージ（鏡像）の関係になる。

| | 日本語 | 英語 |
|---------------------|---------|-------------------------------|
| (1) VP | 久美子を見た | saw Kumiko |
| (2) NP | 数学の本 | books on math |
| (3) PP ³ | 東京から | from Tokyo |
| (4) NP | きのう買った本 | books that I bought yesterday |
| (5) CP | 那覇へ行ったら | that she went to Naha |

これら(1)–(5)の各例はVP、NP、PP、NP、CPに関して比較しているが、日本語ではそれぞれの主要部が句の末端に来ているが、英語では句の先端に来ているという対比が見られる。例えば(1)では、[_{VP} 久美子を見た]と[_{VP} saw Kumiko]という違いがあり、下線を引いた主要部Vの位置も互いに鏡に映した関係になっている。

このように、同じ内容や状況を表す際に、日本

語と英語は互いにミラーイメージの関係で異なる形式をとることが分かる。しかし、その反面、どちらの言語にも同じ種類の句があり、その中には主要部が必ず1つ存在するという共通点があることも見逃せない。

2. あいまいな表現

英語にも日本語にも2通り（あるいはそれ以上）に解釈できる句や文が存在する。

(6) Old men and women came over.

(7) しっぽの長い犬と猫がなかよく遊んでいる。

これらの例において、主語の名詞句は等位構造を成しているが、(6)ではoldがmenだけを修飾するのかmen and women全体を修飾するのかという点で、(7)では「しっぽの長い」が「犬」と「犬と猫」のどちらも修飾できる点で2通りに解釈可能である。また、(6)と(7)をそれぞれ日本語と英語に翻訳しても、同様の多義性が生じる。

次の日本語文では、「自転車で」が「追いかけた」にかかる読みと「逃げた」にかかる読みの2通りに多義である。

(8) 健太郎は自転車で逃げたどろぼうを追いかけた。

さらに、以下の名詞句は、省略が多かったり、独自の完了形がなかったりするという日本語の性質のために、2通りに解釈可能となる。

(9) 注文の多い料理店

(10) 一時国有化された足利銀行（『下野新聞』2005年5月26日）

(9)の「注文の多い」は、客からの注文が多い店なのか、それとも店主が客にいろいろと注文を出す店なのかという点であいまいである。また、(10)では、「一時国有化された」という表現が単純な過去の意味なのか、それとも現在完了としての意味なのかがあいまいである。後者の場合は「一時国有化されている」や「一時国有化中の」とパラフレーズできる。

最後に、次の文は天津（2004: 21-24）によれば9通りに解釈可能である。

(11) 茶色い目の大きな犬を飼っている宇宙人

以上のように、英語にしても日本語にしても、語の配列が同一でも複数の解釈が可能な場合があり、しかもそのような多義性は一定の名詞句や文

に生じるという共通性がある。

3. 複合名詞

教室などにある板書用のボードは、日本語では「黒板」、英語ではblackboardと言うが、どちらも2つの要素から作られた複合名詞である点で共通している。

(12) black+board → blackboard

(13) 黒+板→黒板

（西光 1999: 32）

また、単なる黒い板ではなく、ものを書くという特定の用途に使われる板という特殊な意味を持ち、あとに来る要素に意味の中心があり、音声的にも、英語では最初の要素に第1強勢が置かれ、日本語では高低アクセントの谷間ができないように発音するという（言語間で内容は異なるものの）一定の制約を受ける点で共通性がある。

次の例は「バナナ」と「ワニ」という2つの名詞から作られた複合名詞である。

(14) バナナワニ

この2つの語は、単独ではそれぞれバナナ、ワニと発音されるが、(14)のような複合名詞になるとバナナワニとは発音しないで、バナナワニとなる。これは、上述した高低アクセントの谷間ができないように発音するという日本語の制約によるものである。また、この（架空の？）複合名詞の意味は「バナナがもっている性質を何らかの意味で持っているワニ」であり、意味の中心はあとの名詞の「ワニ」のほうにある。

4. 依頼の疑問文

今度は、質問とその応答あるいは依頼とその応答のような対話に着目しよう。(15)と(16)は英語と日本語による、yes-no疑問文を用いた質問とその応答であるが、どちらも同様に「yes」か「no」で答えている。

(15) A: Can you swim?

B: Yes, I can. / No, I can't.

(16) A: 泳げる？

B: うん、泳げるよ。／ううん、実は泳げないんだ。

これに対して、(17)と(18)は単なるyesかnoかの質疑というよりは、ある種の依頼と応答の対

話になっている。

(17) A: Can you tell me the time?

B: Nine fifteen. / Sorry, I don't have a watch.

(#Yes, I can. / #No, I can't.)

(18) A: いま、何時かわかる？

B: いま、9時15分だよ。／ごめん、時計持っていないんだ。

(#わかるよ。／#わからないよ。)

このような対話では、()の中に示したように「yes」か「no」で答えるのは不適切であり、何時か分かっている場合には具体的な時刻を告げ、分からない場合には時計がないなどの言い訳をするのが妥当である。

(17A)や(18A)のような文は単なる疑問文ではなく、英語であるか日本語であるかを問わず、意味の上では依頼をしている。これは、Grice(1975)の協調の原則と会話の行動指針に従って、この状況では、分かるか否かといった能力を尋ねられているというのは場にそぐわないという判断をすることから推論が始まり、最終的に聞き手のBは「依頼」されていると理解して、応答するのである。したがって、このような推論は英語と日本語に共通する、ひいては言語一般に当てはまるものと考えられる。

5. 敬意表現

日本語には、(19)のように動詞に「お～になる」という表現を添えて尊敬の気持ちを表したり、(20)のように「申し上げる」という動詞を使って尊敬の気持ちを話し手がへりくだった形で表したりする敬意表現がある。

(19) 先生が教室でそのテキストをお読みになった。

(20) わたくしが先生にそのことを申し上げた。

英語には、日本語のような動詞による敬意表現はないが、副詞表現や助動詞を含んだ表現による敬意表現がある。(21)–(26)がそれに当たり、敬意の度合いが下にいくほど大きくなる。

(21) Lend me this book. (この本、貸して)

(22) Will you please lend me this book?

(この本、貸してくれる？)

(23) Would you please lend me this book?

(この本、貸してくれるかな？)

(24) Can you lend me this book?

(この本を貸してくださる？)

(25) Could you lend me this book?

(この本を貸してくださるかしら？)

(26) I wonder if you could lend me this book.

(この本を拝借できますでしょうか？)

このように見てくると、動詞による方法は採らないが、英語にも副詞表現や助動詞などを用いた敬意表現が存在していることが分かる。ここにも言語間での表現形式の違いの背後に共通性があることを見てとれる。

6. 接続表現の省略

最後に、日本語の変種(特に地域方言)と接続表現の省略可能性について考察する。(27)は東京弁、(28)は大阪弁の例であり、同じ内容を表しているが、接続助詞と動詞の形が少し異なっている。

(27) 佑介、自分が悪いって言ってた。

(28) 佑介、自分が悪いて言うてた。

興味深いことに、大阪弁は、東京弁とは異なり接続表現の「て」を省略して(29)のように言うことができる。

(29) 佑介、自分が悪い言うてた。

他方、東京弁でも、(30)から「に」を省略して(31)のように言うことができる。

(30) こんど、うまいラーメン食べにいこうよ。

(31) こんど、うまいラーメン食べ行こうよ。

また、大津(2004)によれば、このような「て」と「に」の省略が可能な動詞は、それぞれ「言う」と「思う」、「行く」と「来る」に限られるという。したがって、大阪弁において、「言う」の代わりに例えば「わめく」のような(「色」のついた意味をもつ)動詞を使うと、その前では「て」を省略できない。

それでは、「言うてた」や「行こう」の前なら、いつでも省略できるのだろうか。答えは、(32)と(33)が示すように、当該動詞の前に「しつこう」や「恵比寿へ」のような表現が介在して、隣接性の条件が破られると、それぞれ「て」と「に」は省略できなくなる。

(32) 佑介、自分が悪い*(て)しつこう言うてた。

(33) こんど、うまいラーメン食べ*(に)恵比寿(へ)行こう。

以上、日本語の地域方言と接続表現の省略可能

性を見てきたが、同様の接続表現の省略可能性は英語においても観察される。

(34) Yusuke said (that) he was wrong.

(35) Yusuke shouted *(that) he was wrong.

(36) Yusuke said sadly *(that) he was wrong.

(34) と (35) が示していることは、say のような「無色」の動詞では接続詞の that を省略できるが、shout のような「色」のついた動詞は省略できないということである。また、(36) は sadly のような語が介在して隣接しなくなると、省略は不可となる。

このように、日本語と英語には、地域方言を含めて様々な違いが存在する一方で、言語や方言を越えて成立する、接続表現の省略に関する共通性があることが分かる。

おわりに

本論文では、ミラーイメージ、あいまいな表現、複合名詞、依頼の疑問文、敬意表現、接続表現の省略という6つの観点から日本語と英語を比較して、意味と形式がそれぞれどのように対応するかを見てきた。このような議論を通じて、日本語と英語は、それぞれ音声的、形態的、統語的、さらには語用論的・社会言語学的レベルにおいて異なる形式で具現するが、抽象度を上げてみると両言語には普遍文法に基づく一定の共通性／普遍性があることを示した。

注

1. ここに示したまとめは西光 (1999) の第1章 音声学・音韻論の議論に基づいている。
2. この第1節から第6節までに挙げた日本語と英語の例文は、基本的に大津 (2004) から引用したものである。第1節は同書の探検13「ミラーイメージ」より、第2節は探検1と3の「あいまいな文①③」より、第3節は探検6「名詞と名詞をくっつける」より、第4節は探検10「依頼の疑問文」より、第5節は探検11「英語の敬語」より、第6節は探検14-15「省略①②」より、それぞれ引用している。なお、それ以外の場合は、その都度出典を示すことにする。
3. 日本語の PP は Postpositional Phrase、英語の

PP は Prepositional Phrase の略号である。

引用文献

Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation." In Peter Cole and Jerry L. Morgan, eds. (1975) *Speech Acts, Syntax and Semantics* 3, Academic Press, Inc.

西光義弘 (1999) 『日英語対照による英語学概論』増補版. くろしお出版.

大津由紀雄 (2004) 『探検! ことばの世界』ひつじ書房.

『下野新聞』2005年5月26日

『讀賣新聞』、2005年6月12日

Abstract**Meaning-Form Correspondence and a Sketch of
a Comparative Study of Japanese and English****Kazutaka Sasaki**

The purpose of this article is to make a sketch of how meanings are associated with sounds in Japanese and English from a descriptive and slightly theoretical point of view. In particular, I compare Japanese with English by discussing six types of linguistic facts presented in Otsu (2004): mirror images, ambiguous expressions, compounds consisting of noun and noun, interrogative sentences of request, honorific expressions, and deletion of conjunctions. This discussion shows that Japanese and English differ in the several respects that involve phonological, morphological, syntactic, pragmatic/sociolinguistic phenomena, but that they have certain common and universal properties that are based on Universal Grammar.